

LISSASPAC 2018 年研究大会：タイの図書館事情

山田 美雪
(兵庫県立大学)

The International Conference on Library and Information Science,
2018, Sponsored by Library and Information Science Society for
Asia and the Pacific (LISSASPAC) and the Libraries in Thailand.

By Miyuki YAMADA
(University of Hyogo)

Abstract

This is a report about the libraries in Thailand (Puey Ungphakorn Library of Thammasat University, National Library of Thailand, Thailand Knowledge Park, Library of Wat Muang Kae primary school, and Thailand Creative and Design Center) which we visited, taking the optional tours after the International Conference on Library and Information Science held in 2018.

はじめに

I-LISS は、主としてアジア諸国の図書館情報学関係者を中心とする学術組織 LISSASPAC (Library and Information Science Society for Asia and the Pacific アジア太平洋図書館情報学会、2015 年創立) が 2019 年にアジアから世界規模に拡大・改組した組織である。その LISS-ASPAC としては最後の研究大会が 2018 年 8 月 19-20 日の 2 日間、タイのスコタイタマティラート大学 (Sukhothai Thammathirat Open University 略称 STOU) で開催され、筆者もその末席に座ることが許された。

この大会は “The 1st International Conference on Library and Information Science: From Open Library to Open University

(iCOO-2018)” というテーマで、啓明大学、全北大学 (いずれも韓国)、タイ図書館協会、マハーサーラカム大学、コンケン大学 (いずれもタイ) との共催であった。開催校の STOU は首都バンコクの隣のノンタブリー (Nontha Buri) 県にあり、スワンナプーム国際空港 (Suvarnabhumi International Airport) から車で約 1 時間半程度のところにある。1978 年に設立された国立の通信制社会人大学であり、学生は約 11 万人で 12 学部、修士課程、博士課程も備えている。

4 日後の 24 日から隣国マレーシアのクアラルンプールで IFLA の大会が開催されるため、どれくらいの人数が集まるのかと思うこともあったが、蓋を開けたら 10 か国から 200 人以上と予想以上に参加者が多く、盛況のうちに幕を閉じた。

筆者は仕事の都合上、2 日目からの参加となっ

た。したがって、初日の総会および発表は聞くことができなかったが、これについては大手前大学の孫先生のレポート 1) が大変参考になる。そのため、大会の内容についてはここでは割愛し、その後のオプションツアーで訪れた図書館について述べる。公式のオプションツアーは 20 日だけだったが、日本支部メンバーが 22 日まで滞在したため、ホスト側の計らいで、20 日のタマサート大学図書館の訪問の他、21 日は Thailand Knowledge Park (TK PARK) と国立図書館、22 日は学校図書館と Thailand Creative and Design Center (TCDC) を訪問することができた。

1 タマサート大学図書館

タマサート大学 (Thammasat University) は 1934 年に設立されたタイで 2 番目に古い国立大学で、4 つのキャンパスに約 2 万 8 千人の学生が在籍している。中でも法学・政治学分野では国内トップクラスであり、多くの著名人を輩出している。また 1965 年にタイ国内で最初の日本語学科を設立した大学で、日本語を学ぶ学生も多い。

今回見学したのは、バンコク郊外にあるランシットキャンパス (Rangsit Campus)(図 1) にあるプオイ・ウンパーコーン図書館 (Puey Ungphakorn Library) (図 2) である。同館は、学内に 11 館ある図書館の一つで、1965 年に当時の経済学部長 Dr. Puey Ungphakorn によって「経済学部図書館」として設立された。その後 1996 年に彼の名前に因んだ Puey Ungphakorn Library と改称された (図 3)。博士は同大学を卒業後、財務省を経て国立銀行の総裁を 12 年間務めた。その後大学に戻り、第 10 代学長としてランシットキャンパスを作り、理学部を新設するなど、同大学の発展に力を尽くした。1996 年

には図書館の蔵書充実のために基金が作られ、2002 年に現在の建物が建てられた。同キャンパスでは学部教育を主としているため、図書館も学部生向けとなっている。このキャンパスは 4 つのキャンパスの中で約 2.8 平方キロメートルと最大規模を誇り、キャンパス内は学生寮、付属病院、スポーツセンター等もある。



図 1 タマサート大学ランシットキャンパス構内



図 2 プオイ・ウンパーコーン図書館



図3 図書館の成り立ちを説明する展示

参加したライブラリーツアーの説明によると、スタッフは25人、開館は9時から21時だが、試験期間中は24時迄開いている。学内 ILL は当日10時までに申し込むと、同館を含むランシットキャンパスの図書館と大学本部のあるタープラチャン (Tha Prachan) キャンパスの図書館は同日の14時半までには請求資料が届く。学内便は専用の車が走っているとのことだった。また身分証明書を見せれば一日20バーツ(約70円)で学外者も入館出来る。蔵書構成は全館で図書(冊子)が約140万冊、雑誌が10万6千種、電子書籍が3万6千冊、年間利用者数は87万人以上で、うちこの図書館に限れば図書は28万冊、雑誌は217種、新聞10種、座席数は2310席である。18,700平方メートルもの規模の割に蔵書数が少ないようにも感じられたが、学内 ILL 網が充実していること、電子書籍などデジタル資料が多いこと、このキャンパス自体が学部教育を主体としており、同館は学部生に学びの場を提供することに力点を置いているものと考えられる。

館内はWiFiが完備され、1階は飲み物持ち込みが可能な自習用のスペースであり、蔵書の利用を中心とする図書館スペースは3階にある(図4, 5)。4階には視聴覚ルームなどがあり、設備・サービスは日本の大学図書館とほぼ同じレ

ベルと感じたが、展示の仕方などはアメリカの大学図書館に近い印象を受けた。目録はDDCを元にしたタイのローカルの分類法(図6)を使用しているとのことだった(この点は大学・公共とも共通)。同館は日本語関係の図書も約2万冊所蔵しており、これは同じキャンパス内にある東アジア研究所の蔵書が移管されたものである。この研究所は当初、日本研究所として1984年学内に設置された。その後日本政府からの資金援助もあり、講堂や茶室を備えた建物が作られた。その後組織再編で東アジア研究所となり、現在はその中の東アジア学科の中に日本研究コースが設けられている。



図4 コピーコーナー



図5 レファレンスカウンター



図6 タイのローカルの分類

近年同館のすぐ隣に、4階建てのセルフラーニングセンター（いわゆるラーニングコモンズ）が作られた。総床面積が15,300平方メートル。カラフルな外観に加え、内部はガラス張りとし吹き抜け構造で広々としている（図7 ライブラリーツアーの様子）。1200席の座席、228台の端末が備えられ、7時から22時まで開館している。



図7 スクリーンに映っている建物がラーニングセンター

2 Thailand Knowledge Park (略称 TK Park)

Thailand Knowledge Park（以後 TK Park という）はタクシン首相（当時）が打ち出した「Thailand Knowledge（＝タイ国民、特に将来

の国の人材となる子供達に知識をつけてほしい）」という国家プロジェクトに基づいて、政府がタイ全土に設置した文化情報機関である。

私達が訪れたのはバンコク市内の中心部にあるタイで最大級のショッピングモール「Central World」にある（図8）TK Park の中枢部分の図書館であった。日本でもつがる市立図書館など、近年ショッピングセンター内に図書館が設置されているケースが出てきているが、建物の大きさ、図書館の広さではこちらの方がスケールが大きい。



図8 TK Park 入口

TK 自体がプロジェクトであるため、通常の公共図書館とは異なり、民間企業が出資したファンドを基に首相府傘下の機関である知識開発管理事務所（Office of Knowledge Management and Development 略称 OKMD）が運営している。21世紀に相応しいデザインのものを、ということで、仙台のメディアテーク、ロンドンのIdea Store、パリのポンピドゥーセンター等の海外の公共施設等も参考にして2005年にオープンした。当初は同館6階にあったが、手狭になったので2013年に8階に移った。

TK Park は青少年メディア総合図書館として位置づけられ、この TK Park の 3700 m² の広大な館内には、Reading Park、TK Kid Area(図 9)、Music Library(図 10)、IT Library(図 11)、TK Theater、Open Square(図 12)、TK Shop の 7 つのゾーンで多様なメディアが提供され、青少年が楽しみながら、学べる Edutainment の公園になることが目的とされている。TK Park 事務局の業務は都市内・郊外の学習施設のモデル開発だけでなく、Digital TK というインターネット上の学習資源および読書支援活動のモデル開発、また学習社会になるように、これらの結果をベースにして研究、国内研修などの活動を拡大している。



図 9 TK Kid Area

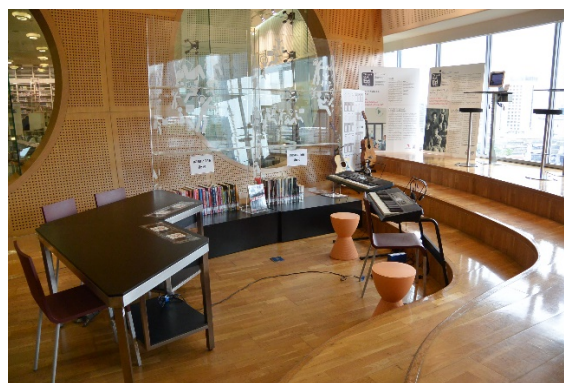


図 10 Music Library



図 11 IT Library

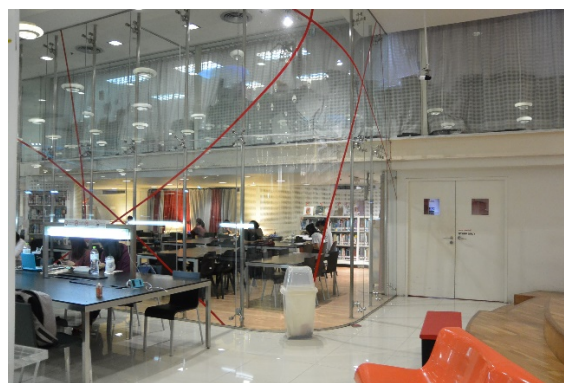


図 12 Open Square

蔵書は 1200 冊 (図書、雑誌の合計)。CD 等の視聴覚資料は多少あるがほとんどがデジタルアーカイブ化、データベース化されているとのことだった。本の貸出返却は自動貸出機で行う

(図 13)。なお、冊子の資料に加えて、TK Public Online Library というオンラインライブラリーも 2005 年から展開しており、約 7000 点のコンテンツを提供している 2)。



図 13 自動貸出機

実際にキッズルームにある端末でデモンストレーションしてもらったオンラインゲームも TK Park の HP からダウンロードして使えるとのことだった。IT ルームではシニア層のパソコン教室も開いており、毎回 5-10 人の参加があるとのことである。

この館のスタッフは 66 人で全員常勤職である。ただし、司書だけでなく、事務員、IT 専門職など合わせた総数である。開館は火曜日-日曜日の 10-20 時。休館は月曜日である。入館料は ONE DAY PASS が 70 バーツ (約 250 円)。50 バーツはデポジットで、実質 20 バーツ (約 70 円) であり、当日中なら入退館は自由である。年間パスは 24 才以下は 100 バーツ (約 350 円)、25-59 才は 200 バーツ (約 700 円)、このショッピングセンターのカード会員 (年間 200 バーツ)、僧侶、身体障がい者、高齢者は無料である。いずれにしろ格安の値段で便利な場所にあるおしゃれな施設を使えることから人気があり、土日は満員になることもあるそうである。

TK Park の根幹にあるのは「Living Library」という概念である。CHUTIRAT は「『Living

Library』は、利用者の情報の要求だけでなく、利用者の充実感を重要にし、活発なサービス・活動を提供できる図書館である」と定義している 3)。

タイ全土の TK Park では「Living Library」の概念の下に様々な「Activity」を展開している。通常の図書館では、教育分野等の他の分野と図書館がうまく連携していないことから、ここでは他分野との交流を持つようにしている。例えばバンコク首都管理庁、コミュニティ組織開発研究所、その他の公共機関や民間企業と協同で生活の質の向上させるスキルと新しい知識を学習することを促進するために小さなコミュニティベースのラーニングセンターを設立している。更にミニシアター、IT ルームなどでは「学ぶ、話す、読む」ことをミックスさせた試みが行われている。

3 タイ国立図書館 (National Library of Thailand)

国立図書館 (National Library of Thailand) (図 14) はチャオプラヤ川の東のバンコクのドゥシット (Dusit) 地区にある。この地区は王宮や国会議事堂などがある行政区のためであろうが、私達の訪問時は警備が他地区より厳しかった。



図 14 国立図書館外観

国立図書館は 1905 年にラーマ五世が先王ラーマ四世の生誕 100 年を記念して、王宮の中に既存の 3 つの王立文庫「ワチラヤーン御文庫」、「仏教文庫」、「王室経蔵」を統合し、タイ国最初の公開国立図書館である国立ワチラヤーン図書館を創設したことから始まる。その後数回の移転を経て 1966 年に現在の場所に落ち着いた。同じ敷地内に国立文書館 (National Archives of Thailand) もあるが、今回は残念ながら時間が足りず訪れることはできなかった。

国立図書館の場合、通常は中央館としての図書館の役割が主眼となるが、ここタイにおいては設立の経緯からしても「中央図書館」というより「王立図書館」のカラーが強く、歴代王朝の古文書や宝物を所蔵するという博物館的な要素も強く感じられた。数年前に拡張工事を終えたということで、新館は現代的で綺麗な建物であったが、本館 (旧館) は日本の昭和の時代を思わせるレトロな設備であった。1 階は雑誌と新聞のエリア (図 15)、2 階は閲覧室 (図 16) で、椅子と机がスペースの大半を占めており、利用者はここに集中していた。4 階は博物館のエリアである (図 17) (3 階と 5 階はクローズドエリアになっており、関係者しか入れないようであった)。館内には無料の WiFi が備えられ、改築済みのエリアにはラーニングコモンズのように机と椅子が配置されており、PC を持参して作業をする人が多かった。国の施設ではあるが、館内の案内表記の大半がタイ語であり、今回見学した施設の中では、小学校を除いて一番英語表記が少ないように見受けられた。



図 15 雑誌と新聞のエリア



図 16 閲覧室



図 17 博物館の入口

4 学校図書館 (ワット・ムアン・ケー小学校)

ワット・ムアン・ケー (Wat Muang Kae) 小学校 (図 18) は、元々仏教寺院に併設された男子校であったが、その後男女共学の公立校になっている。仏教はタイの国教ではないが、近代教育以前から仏教寺院が公教育を担ってきた経緯から寺院併設の小学校は珍しくない。小さいながらも建物の入口から非常に綺麗に装飾されており、アットホームでカラフルな雰囲気であった。図書館 (図 19, 20, 21) もそれだけで独立しているというよりは、工作ができるなど多目的に使える部屋にしており、学校司書も専任で常駐しているわけではなかったようである。また、この小学校はムスリムコミュニティと仏教コミュニティの間に立地しているため、多文化共生の意味から、共通語として英語の授業がある、とのことだった。



図 19 ワット・ムアン・ケー小学校図書館の入口



図 20 ワット・ムアン・ケー小学校図書館館内



図 18 ワット・ムアン・ケー寺院 (右) と附属小学校 (左) 外観

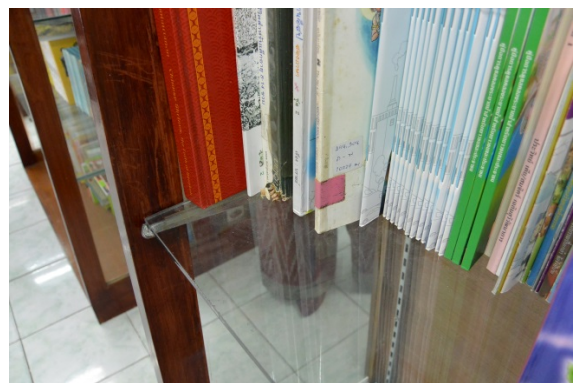


図 21 ワット・ムアン・ケー小学校図書館書架

5 タイ・クリエイティブ・デザインセンター (Thailand Creative and Design Center 略称 TCDC)

タイ・クリエイティブ・デザインセンター (Thailand Creative and Design Center : 以後 TCDC という) は、2005 年にタイ政府が国内のデザイン産業を活性化させ、支援する目的でオープンした国立のデザイン&アートの複合施設である。TK Park と同じ OKMD が運営している。訪問したのは一番大きいバンコクの TCDC(図 22, 23, 24) であり、開館は火曜日-日曜日の 10:30-21:00 で月曜が休館日である。



図 22 TCDC 外観



図 23 TCDC 入口



図 24 ロビー (旧バンコク中央郵便局の展示説明)

ギャラリー、ライブラリー (図 25)、コワーキングスペース (図 26) に休憩コーナー (図 28, 29)、ショップやカフェも併設し、デザイナーから学生まで、幅広く利用されているとのことだった。カフェと屋上スペースは自由に利用できるが、図書室とコワーキングスペースはメンバー専用エリアとなっている。図書室は、アート関連を中心に 5 万冊以上が所蔵されている。タイ語は少なく外国語 (英語) 資料が多かった (図 27)。政府が運営するだけあって利用料は安く、ONE DAY PASS は 100 バーツ、年会費は 1200 バーツであり、人気が高いとのことだった。クラシックな外観の中は非常にモダンであり、什器類もデザイン性が高いものが多かった。利用者は 5 階の入口でスマートフォンに出る利用者 ID (バーコード) をかざして入館する。訪れた当日もノマド族と思いき若者たちが PC で作業する姿が目立った。日本でもこのようなサードスペースを備えた公共施設は増えているが、規模の大きさとデザイン性はこちらに軍配があがる。



図 25 主に所蔵する雑誌



図 28 休憩コーナー入口



図 26 コワーキングスペース



図 29 休憩コーナーにあるセルフカフェとサッカーゲーム



図 27 英語資料

また、建物内には Material & Design Innovation Center があり、そこには、タイで手に入るものを中心とした 8000 種類の素材が集められ、8つのカテゴリーに分類されて、データベース化されている。また実際に、入館者が見て触ることも出来る。バンコク市内で入手できる素材については、その販売先の地図と連絡先が明記されており、新しいビジネスマッチングの機会を提供している。なお、これは別途年会費が必要となる。

TDCD はタイの第 2 番目の都市であるチェンマイ (Chiang Mai) にもあり、更に 35 の Mini TCDC が地方に展開しており (図 30)、デザイン学習の機会を提供したり、地域機関との連携を

図ったりするなど、地域と都市部と両方で持続可能なデザイン産業の発展を目指している。その他、TCDC Common Center や AIS Design Center 等の機関をもち、タイ全土でナレッジマネジメントネットワークを展開している。



図 30 タイ各地にある TCDC

バンコクの TCDC は当初プロンポロン (Ph Rom Phong) 駅に直結した商業ビルの中にあったが、2017 年に旧市街地のチャルンクルン通り (Charoen Krung Road) にある旧バンコク中央郵便局ビルに移転した。政府はこの地区を中心として、“Creative District”、“Creative Thailand”を目指して、2018 年から Bangkok Design Week 2018”、“Bangkok Art Biennial”など様々なイベントを展開している。

結び

タイの図書館事情を日本語で知る機会は少ない。他方、今日来日するタイ人は年々増え続けており、留学者の数も多くなっている。筆者の勤務先も 2019 年 4 月から国際系の新学部を作り、タイをはじめとする東南アジアの留学生達が数多く入学してくる予定である。今日タイの大学進学者率は約 49%、世界第 62 位、ASEAN ではシンガポールにつぐ 2 位である 4)。ちなみに日本の進学率は 2018 年時点で 64%、世界

第 44 位である。経済成長率ではタイはここ数年 ASEAN の中では低迷しているとはいえ、日本を上回っており、2018 年はタイが 4.6%、日本は 1.14% である 5)。タイ政府は 2015 年に「Thailand 4.0」という長期的経済ビジョンを打ち出し、2035 年に先進国入りするという目標を掲げている 6)。「Thailand 4.0」の中で政府は 10 の重点分野の産業を出しているが、そのなかで特にデジタル技術を重視している。今日デジタル技術はあらゆる産業の高度化に不可欠の要素となっており、デジタル経済社会の進展は世界的な潮流となっている。政府の傘下機関が運営する TK Park や TCDC でデジタル技術を駆使しているのも、資料の長期保存には適しているといい難い東南アジアの蒸し暑い気候もさることながら、そういった国策の影響があるのではないかと考えられる。

また直接図書館情報学とは関係ないが、今回の学会の参加で印象的だった点がいくつかある。

まず、会場のスコタイである。ここは 13 世紀に栄えたスコタイ王朝の都があったところであり、旧都のイメージで、遺跡と寺院と田んぼがある程度しか聞いていなかった。しかし実際には、大学のすぐ側には巨大なショッピングセンターがあり、近隣住民が車で来て買い物や飲食を楽しむ光景が繰り広げられていた。滞在中は毎朝その SC にあるスターバックスまで歩いて朝食を取っていたのだが、朝から車やバイクで来た人達が、コーヒーを片手に本を読んだり、タブレットやスマホを操作したり、おしゃべりしたりと、日本と変わらない光景がくり広げられていた。

また、学会スタッフおよびオプショナルツアーで出会った当該部門の責任者 (HEAD) 達は、圧倒的に女性が多かった。日本でも図書館は女性が働きやすい職場のひとつであるが、管理職クラスになると必ずしもそうとはいえない。

NDLのように女性管理職比率が33%を超える館もある7)が、全体的にみれば多くはない。ましてや一般企業の管理職となると圧倒的に男性が多いのが実情である。グラントソンの調査8)によると、女性管理職の割合は、タイは37%とアジアで第2位、世界レベルでも第4位と非常に高い。また、管理職に女性がいない企業の比率は21%と半数以下である。一方、日本は管理職に占める女性の割合は7%、管理職に女性がいない企業の比率は73%である。さらに、この調査対象国の中では日本は全てのランキングの最下位にランクしており、男女格差が大きいことを実感した。つまり、経済力やインフラ整備、大学進学率ではタイより日本がリードしているが、社会構造等他の面では必ずしもそうでないということである。

図書館に目を向けると、同一組織内の図書館の電子化・連携は進んでおり、むしろ日本より一歩先に進んでいる面もあった。しかしながら、一方で組織外のILLや図書館間協力はまだまだ不十分のように見受けられた。これには様々な要因が考えられるが、一つには自治体設置の公共図書館が少ないことがあるように思われる。

タイ国内で最も発展しているバンコク首都圏は、東京都の7割の面積に1000万を超える人口がひしめき、更に人口増加が加速している9)。しかし、東京都の公共図書館が400館近くある10)のに対し、800万人以上が住むバンコク中心部に公共図書館は37館しかない11)。そして筆者の訪問中は、バンコクではBangkok City Library以外の公共図書館の名前をほとんど聞かなかった。人口比からいっても、タイの公共図書館は中心部でさえ絶対数が少ないと思われる。そのため、国が率先してTK PARKやTCDCのような大規模な施設を作ってカバーしているのではないかと考えられる。大学図書館も条件付きではあるが、格安で一般市民も利用でき、大

学図書館自体も非常に巨大な建物であった。このあたりの事情はまた別の機会に検討してみたいと思う。

LISSASPACはI-LISSと改称し、次年度の研究大会は2019年7月11-13日、台北にある国立台湾師範大学(通称「師大」)で開催予定である。師大は、中等教育に携わる教師陣の育成機関として台湾を代表する教育大学で、学生数は約1万人。交通の便がよいところで、日本からは飛行機で3時間程度、格安のLCCの便も多く飛んでおり、行きやすいところなので、興味のある方は是非とも参加していただきたいと思う。国を超えた交流は、図書館学の研究・教育のみならず実務面でも大いに役立つものであると確信するからである。

最後にデレゲーションを組んで下さったLISSASPAC日本支部のメンバーの方々、関西大学の村上泰子先生、STOU関係者、タイ図書館協会の皆様に改めて感謝を申し上げたい。

引用文献

- 1) 孫誌銜「LISSASPAC バンコク大会—The International Conference on Library and Information Science: “From Open Library to Open Society” (iCoo 2018)に参加して」『図書館雑誌』112(12) 2018 日本図書館協会 pp.834-835.
- 2) Thailand Knowledge Park <<http://www.tkpark.or.th/tha/home>>
- 3) THAMSEMA CHUTIRAT 「タイと日本の読書教育における学校図書館の役割と課題」『筑波大学修士(図書館情報学)学位論文・平成25年3月25日授与(30951号)』pp.19-20 <<http://hdl.handle.net/2241/121374>>
- 4) グローバルノート「世界の大学進学率 国際比

- 較」2017 <<https://www.globalnote.jp/post-1465.html>>
- 5) IMF World Economic Outlook Database October 2018 <<https://www.imf.org/en/Publications/SPROLLS/world-economic-outlook-databases#sort=%40imfdate%20descending>>
 - 6) 大泉啓一郎「タイランド 4.0 とは何か」日本総研 <<http://www.jri.co.jp/file/report/rim/pdf/10060.pdf>>
 - 7) 内閣府「共同参画」2017 年 7 月号 <http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2017/201707/201707_01.html>
 - 8) グラントソン「国際ビジネス報告 2016」 <https://www.grantthornton.global/globalassets/wib_turning_promise_into_practice.pdf>
 - 9) 日本経済新聞「激戦バンコクに新巨艦店」2018 年 11 月 10 日 朝刊
 - 10) 東京都立図書館「都内公共図書館一覧」 <https://www.library.metro.tokyo.jp/lib_info_tokyo/public/list/>
 - 11) Hxngsmud prachachn pheux "khr" *komchadluek.net* (原文はタイ語) <<http://www.komchadluek.net/news/scoop/279246>>
- *各 WEB サイトの最終アクセスは 2019 年 2 月 15 日

(参考文献及び WEB サイト)

- Sukhothai Thammathirat Open University <<http://www.stou.ac.th/eng>>

- Thammasat University <<http://www.tu.ac.th/en>>
- Puey Ungphakorn Library <<http://203.131.219.169/libraryt/>>
- Srichan Chancheewa, 3 Cs to Learning: The Thammasat University Libraries experience , Proceedings of the IATUL Conferences, 2015 <<http://www.iatulconference2015.org/programme/07-july-2015>>
- Institute of East Asian Studies <http://www.asia.tu.ac.th/ieas/IEAS_Eng/Eng_index.html>
- 小笠原綾「リサーチ・ナビ アジア情報室通報」第 6 巻 2 号 2008 年 6 月 国立国会図書館 <<https://rnavi.ndl.go.jp/asia/entry/bulletin6-2-1.php>>
- ジェトロ「平成 27 年度タイにおける情報通信・IT 事情に関する調査」2015 年 10 月 日本貿易振興機構 <https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2bf76b9d5b26c0b1/thrp_it201510.pdf>
- Thailand Creative and Design Center <<http://web.tcdc.or.th/en/Home/>>
- Office of Knowledge Management and Development <<http://www.okmd.or.th/en>>
- 野津隆志『国民の形成：タイ東北小学校における国民文化形成のエスノグラフィー』（2005）明石書店
- ARC 国別情勢研究会『ARC レポート：経済・貿易・産業報告書 2018/19 タイ』（2018）
*各 WEB サイトの最終アクセスは 2019 年 2 月 15 日